

# うちわたし 野多目拈渡遺跡Ⅱ

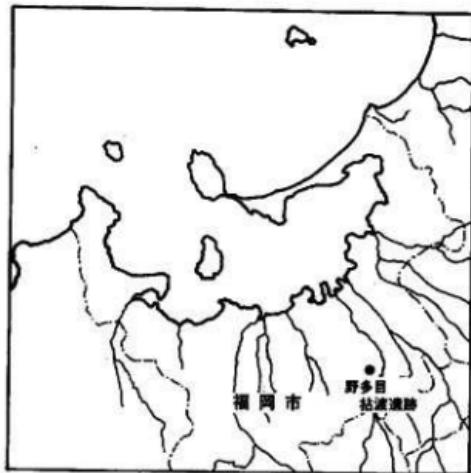
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第136集

1 9 8 6

福岡市教育委員会

# うちわたし 野多目拈渡遺跡Ⅱ

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第136集



1 9 8 6

福岡市教育委員会

## 序 文

この報告書は、福岡市下水道局南部建設課が、南区野多目地内に下水道管を埋設するに際し、事前に発掘調査を行なった野多目古墳跡の報告書です。

今回の調査では、縄文時代後期の貯蔵穴から古代の住居址にいたる多くの成果を上げることができました。

本書が市民の皆さまに広く活用いただくとともに、学術研究の分野において貢献することを念願します。調査に際して多くの人々の御協力と助言をいただき、心から謝意を表します。

昭和61年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

## 例 言

1. 本書は、福岡市下水道局南部建設課が計画した下水道管埋設工事に伴い、1984年10~11月に調査を実施した、野多目古墳跡の発掘調査報告書である。
2. 野多目古墳跡は、1980年7~11月・1981年8~10月に遺構確認調査が行なわれ、「野多目古墳跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書第93集」福岡市教育委員会1983として報告書が刊行されている。よって、今調査は野多目古墳跡第2次調査とする。
3. 本書の執筆・編集は、力武卓治・大庭康時が行なった。
4. 本書に使用した遺物番号は、すべて通し番号とし、実測図・写真番号ともに一致している。
5. 本書に掲載した縄文土器の拓本は、外面のみ・内面のみ・両面ともにとったものと区々であるため、通例とは異なり、断面図の右に外面の、左に内面の拓本を貼付した。さらに、誤認をさけるため、外面にF、内面にBの記号をつけて表示した。
6. 本書に使用した写真は、遺構を力武、遺物を大庭が撮影したものである。

## 本文目次

第一章	はじめに	1
1. 発掘調査にいたるまで		1
2. 発掘調査の組織と構成		1
3. 遺跡の立地と環境		2
4. 第1次調査の概略		2
第二章	発掘調査の記録	4
1. 発掘調査の概要と経過		4
2. 遺構と遺物		5
(1) A区 1号流路		5
(2) A～B区 2号流路		5
(3) E～H区		12
(4) I区 1号溝		15
(5) J～K区 3号・4号流路		15
(6) M～N区 1号～3号貯藏穴		21
(7) P・Q区		25
第三章	まとめ	27

## 插図目次

Fig.1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
Fig.2	遺跡周辺図 (1/2,500)	4
Fig.3	1号流路出土遺物 (1/3)	5
Fig.4	A・B区遺構実測図 (1/40)	6
Fig.5	2号流路出土遺物1 (1/3)	8
Fig.6	2号流路出土遺物2 (1/3)	10
Fig.7	2号流路出土遺物3 (1/3)	11
Fig.8	E～H区出土遺物 (1/3・1/2)	12
Fig.9	E～F区遺構実測図 (1/40)	13
Fig.10	F～H区遺構実測図 (1/40)	14
Fig.11	I号溝出土遺物 (1/3)	15
Fig.12	I区遺構実測図 (1/40)	15

Fig.13	J・K区遺構実測図 (1/40) .....	16
Fig.14	3号流路出土遺物 (1/3) .....	18
Fig.15	灰色砂質土層出土遺物 (1/3・1/2) .....	19
Fig.16	4号流路出土遺物 (1/3) .....	20
Fig.17	S X01出土遺物 (1/1) .....	21
Fig.18	M・N区遺構実測図 (1/40) .....	22
Fig.19	小ピット・3号貯蔵穴出土遺物 (1/3) .....	24
Fig.20	1号・2号貯蔵穴出土遺物 (1/3) .....	24
Fig.21	P・Q区遺構実測図 (1/40) .....	26

## 図版目次

- PL.1 (1) 調査開始 (P区、南西より) (2) 調査風景 (P区、北東より)
- PL.2 (1) 1号流路土層 (南より) (2)・(3) 2号流路土層 (南より)
- PL.3 (1) E区ピット群 (西より) (2) F区ピット群 (南より)
- PL.4 (1) 1号溝 (東より) (2) 1号溝 (北より)
- PL.5 (1) 3号流路上層 (北より) (2) 3号流路西岸 (北より)
- PL.6 (1) 4号流路西岸 (北より) (2) M区貯蔵穴群 (東より)
- PL.7 (1) 1号貯蔵穴 (南より) (2) 1号・2号貯蔵穴土層 (南より)
- PL.8 (1) P・Q区遺構 (南西より) (2) Q区土層 (北東より)
- PL.9 (1) 1号流路出土遺物 (1/2) (2) 2号流路出土遺物 1 (1/2, 1/3)
- PL.10 2号流路出土遺物 (1/3)
- PL.11 (1) E～H区出土遺物 (1/2, 1/1) (2) 1号溝出土遺物 (1/2)  
(3) 3号流路出土遺物 (1/2)
- PL.12 灰色砂質土層出土遺物 (1/2)
- PL.13 4号流路出土遺物 (1/2)
- PL.14 (1) S X01出土遺物 (1/1) (2) 小ピット・3号貯蔵穴出土遺物 (1/2)  
(3) 1号・2号貯蔵穴出土遺物 (1/2)

## 付 図

野多目古渡遺跡第1次調査・第2次調査地点位置図 (1/300)

# 第一章 はじめに

## 1. 発掘調査にいたるまで

1984年、福岡市下水道局南部建設課より、福岡市南区野多目地内に下水道管理設工事の計画が上げられた。同地は、野多目C遺跡内に立地し、下水道管理設予定道路の南側に隣接する野多目中央公園は、1980年7~11月と1981年8~10月の2次にわたって調査され、「野多目古墳遺跡福岡市埋蔵文化財調査報告書第93集」(福岡市教育委員会、1983)として報告されている。この調査により、旧石器時代から古墳時代に及ぶ遺物・遺構を確認することができた。

福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財第1係では、1984年8月23日より29日まで、試掘調査を実施した。試掘調査は、地下埋設物の確認調査に立会する形でなされ、25ヶ所に試掘トレーニチを設定した。その結果、野多目中央公園の前をほぼ東西にのびる延長約170mの部分と、そこから南西に70mほど離れた2ヵ所で遺構を確認し、発掘調査を要すると判断した。

そこで、当該地に比較的近い福岡市博多区寿町2丁目(南福岡トナシ遺跡)で発掘調査を実施していた力武卓治・大庭康時を発掘調査担当とし、下水道局南部建設課と業者をまじえて協議を持った。文化課としては、力武・大庭が南福岡トナシ遺跡で現に発掘調査中であり、これを中断して野多目古墳遺跡の調査に専従することはできない、という問題点があった。一方下水道局としても、下水道管理設予定道路は、朝夕の通勤・通学時間は占有できないこと、道路の舗装をカットして掘削し、覆鋼板をかぶせなくてはならず、一時に掘削できないなどの事情があった。そのため、両者の間で調整がはかられ、業者の工程にあわせて、小刻みな調査を間をおいて行なうという事で合意ができた。

これに基づき、1984年10月24日より、力武・大庭を担当として、発掘調査が実施された。

## 2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	福岡市下水道局南部建設課
調査主体	福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第1係(現埋蔵文化財課第1係)
事務担当	柳田純孝(係長、現埋蔵文化財課課長) 折尾学(現第1係長) 松延好文
調査担当	山崎龍雄(試掘調査) 力武卓治 大庭康時
調査作業員	江越初代 黒木静子 桑野正子 関加代子 関政子 曽根崎昭子 山崎光一
整理作業	生垣綾子 酒井もと子 末永トシ子 副島智子 鶴ちとせ 深沢美代子 村田喜代美 北原章子 金子幸世 稲益貴子

### 3. 遺跡の立地と環境

本調査地点は、野多目古墳遺跡（福岡市南区大字野多目字古渡）に含まれる。「福岡市文化財分布地図 中部南部」（福岡市教育委員会 1980年）では、野多目C遺跡群として周知せられた遺跡である。福岡平野を北流する那珂川の西岸に形成された河岸段丘上に位置している。

野多目地内には、野多目前田遺跡・野多目古屋敷遺跡が調査・報告されている。野多目前田遺跡は、奈良時代及び13~14世紀の溝状遺構や埴・櫛が検出された遺跡である。野多目古屋敷遺跡では、奈良~平安時代の溝状遺構が検出されている。

旧石器時代の遺跡としては、野多目古渡遺跡の第1次調査で尖頭器が検出されている他、日佐遺跡群でナイフ形石器が採集されている。

縄文時代では、柏原遺跡で早期・晚期の集落址が調査されている。また、野多目古渡遺跡第1次調査では、後期の貯蔵穴・溝状遺構が確認されている。

弥生時代になると、那珂川東岸の丘陵上に、須玖岡本遺跡・門田遺跡など大規模な遺跡が分布している。南大橋遺跡は中期の壇棺墓地。和田遺跡も壇棺墓地とされるが、消滅している。

古墳時代のものとしては、本調査地点のすぐ西に接して野多目古墳群が存在する。南方約1kmには、豊穴系横口式石室をもつ前方後円墳の老司古墳が築かれている。その他、油山山系には、多くの古墳群が分布している。

古代では、三宅廃寺・三宅瓦窯址・老司瓦窯址などがある。南区三宅は、從来那ノ津官家の所在地に比定されていたが、1984年博多区所在の比恵遺跡群で6世紀後半に營まれた倉庫群が検出されるに及び、それを以って那ノ津官家と考える説が浮上してきた。

中世以降については、本遺跡の近辺では必ずしも成果をあげるに至っていない。おそらく、この段階から水田化が進んでいたと考えられる。

### 4. 第1次調査の概略

野多目古渡遺跡第1次調査は、盛土保存を前提とした発掘調査であり、遺構のほとんどはプランの確認にとどめている。そのため、旧石器時代については、包含層を確認したにすぎない。縄文時代の遺構は調査区西半分に分布し、貯蔵穴50基・溝1条と河川跡を確認している。中期末から後期初頭に位置付けられる。弥生時代の住居址・豊穴は、調査区北東部に分布する。前期後半~中期初頭のものである。古墳時代の住居址は、調査区北東部と南部から64基確認されている。古代の櫛立柱建物は、24棟以上確認されている。桁行・梁行の方向から7群以上が考えられるが、未掘のため時期的な関係はわからない。7~9世紀の倉庫群と考えられる。その他溝状遺構・自然流路が確認されている。



Fig. 1 周辺遺跡分布地図 (1/25,000)

1. 野多目拈波遺跡 2. 野多目前田遺跡 3. 野多目古屋敷遺跡 4. 野多目古墳群 5. 野多目浦ノ池遺跡 6. 和田A遺跡群 7. 三宅廐寺 8. 三宅瓦窯址 9. 花畠C遺跡群 10. 老司古墳 11. 老司瓦窯址 12. 老松神社古墳群 13. 五十川高木遺跡 14. 井尻栄町遺跡 15. 井尻地祿神社遺跡 16. 曰佐原遺跡 17. 日押塚古墳  
A. 野多目A遺跡群 B. 野多目B遺跡群 C. 野多目C遺跡群

## 第二章 発掘調査の記録

### 1. 発掘調査の概要と経過

発掘調査は、1984年10月24日～11月1日、11月12日～14日、27日～28日の13日間にわたって行われた。調査部分は道路敷で、おそらく道路舗装時には若干の削平を伴なったと思われ、遺構の遺存状態は予想より悪く、とばされて消滅した遺構も少なくないと思われる。そのため、当初の予定よりも調査の進行は早く、短期間で終了することができた。

調査にあたり、下水道工事の基準点を見通して調査の基準軸を道路の延長方向にもうけ ( $N - 73^{\circ} 25' - W$ )、これを10m単位で区切ってグリッドを設定した。グリッドは、東から西へA・B・C……とし、道路が枝分れして南に折れる部分を、これにつづけてP～Q区とした。調査はP～Q区、F～O区、A～E区の順でなされた。なお試掘では、Q区から70mほど南下した部分で遺構を確認し、調査対象部分としていたが、11月27・28日の調査では遺構は全く検出されていない。調査面積は180 m<sup>2</sup>をはかる。

基本層序としては、舗装をはぐと、まずかつての水田の床土にあたる層があらわれる。その下に数10cmの厚さで部分的には数層にわけうる暗褐色土層があり、地山のローム層にいたる。暗褐色土層で確認できる遺構はなく、遺構は地山面において検出した。また、部分的には埋没した河が地山となっているらしく、厚い砂質土の堆積も確認できた。

以下、グリッドを追って遺構・遺物について述べることにする。



Fig. 2 遺跡周辺図 (1/2,500)

## 2. 遺構と遺物

遺構・遺物については、A区からグリッドごとに記すが、遺構の検出できなかったグリッドについては、述べない。遺構番号・遺物番号はすべて通し番号に改めている。

### (1) A区 1号流路 Fig.4, PL.2-(1)

A区においては、遺構は全く検出できなかった。道路の舗装をはぐとすぐ地山があらわれ、もし遺構がのっていったとしても、とばされて残っていないであろうと思われる。土層の観察によると、A区東端近くでは、浅い川 Fig.3 1号流路出土遺物(1/3)もしくは溝状の落ちこみがみとめられる。これを1号流路とする。さらに東まで掘り進めないので幅等はまったく不明であるが、第1次調査で確認された「第1号川」にあたると思われる。それによると、幅12m前後で北に向って深くなり、深さ1.8mで自然堆積によって埋まつたと考えられる7世紀後半～8世紀末の川としている。A区では、その西岸の一部を検出したと思われる。出土遺物は、土師器片が數点出土したのみである。Fig.3, PL.9、図示できたのは1点のみで、高杯の脚部である。器壁は磨滅している。小片で復元が困難だが、大体脚部幅で、径13cmをはかる。

### (2) A～B区 2号流路 Fig.4, PL.2-(2)・(3)

A区からB区にかけて検出した川と思われる遺構を、2号流路とする。川幅は、10m前後と思われるが、砂質土の堆積状況など土層観察の所見からすると、A区東端で検出した1号流路に切られるか、もしくは同一の川の流路の推移としてとらえられる。深さは、流路による地層の浸食が最も著しくみとめられる西岸付近で、70cm程度をはかる。ただし、この部分においては、西岸のたちあがりが上方で不鮮明となり、より上方まで岸がのびるのか、上位の層によつて切られているのか、はっきりとしない。また、流路の東半分では埋土の上部は擾乱で切られ流路の埋土がどの水準まで上がるのか確認できていはない。これらの点から、流路はさらに深いものであったと推定される。

出土遺物は、土師器・須恵器・瓦などである。Fig.5～7, PL.9・10

2は、高杯の口縁部の小片である。体部から明らかな棱をなして外反する。胎土には砂粒を多く含み、外面淡灰褐色・内面黒褐色を呈する。土師質。3～5は土師器である。3は、高台付碗の高台付近の小片である。付高台で、径7.2cmをはかる。胎土は精良で、白灰色を呈す。4・5は、平底の杯である。4はほぼ完形で、口径13.3～14.2cm、底径8.4cm、器高4.1cmをはかる。外底部には板目压痕がみられ、体部は内外ともにナデ仕上げされている。胎土は砂粒を含み、焼成良好で、淡黄褐色を示す。5は、口縁を欠くが、全体に4と類似する。2号流路西岸出土。



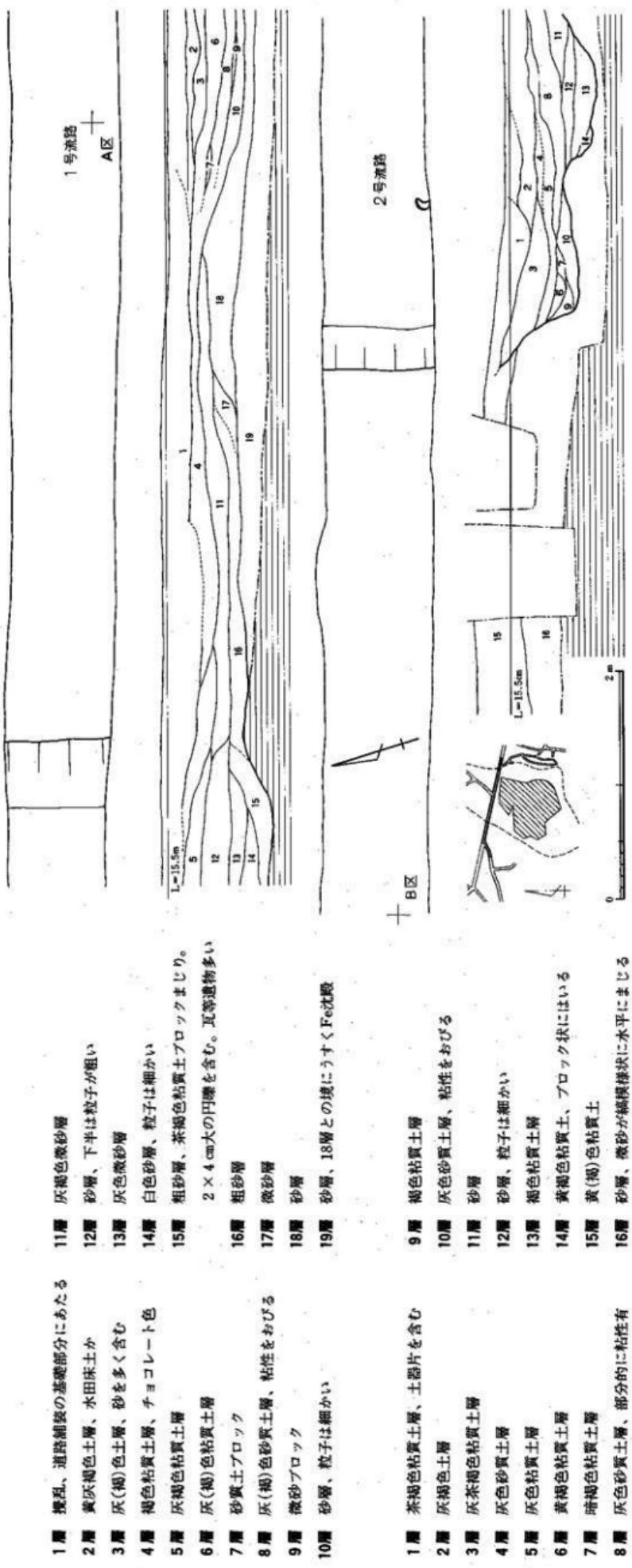


Fig.4 A-B区透視実測図 (1/40)

底径8.3cmをはかる。小砂粒を含み、茶褐色を呈する。6~15は須恵器である。6・7・9には、ヘラ記号がみられる。7は、全体の1/2剥を残し、逆「の」の字形のヘラ記号がつけられている。径12.3cm、器高3.8cmをはかる。8は、径13cmで口唇部内側に小さな段をつくる。西岸出土。10・11は、蓋の小片である。12・13は、坏身の口縁である。12には、かえりがついている。13は、口径15cmと推定される。14・15は甕の口縁部・頸部片である。いずれも櫛描波状文が施され、14では19条を数えることができる。14の口縁部は、粘土紐貼り付けにより、下方に垂れている。波状文の下には、確認できる限りで3条の沈線がめぐらされている。15は、14に比して

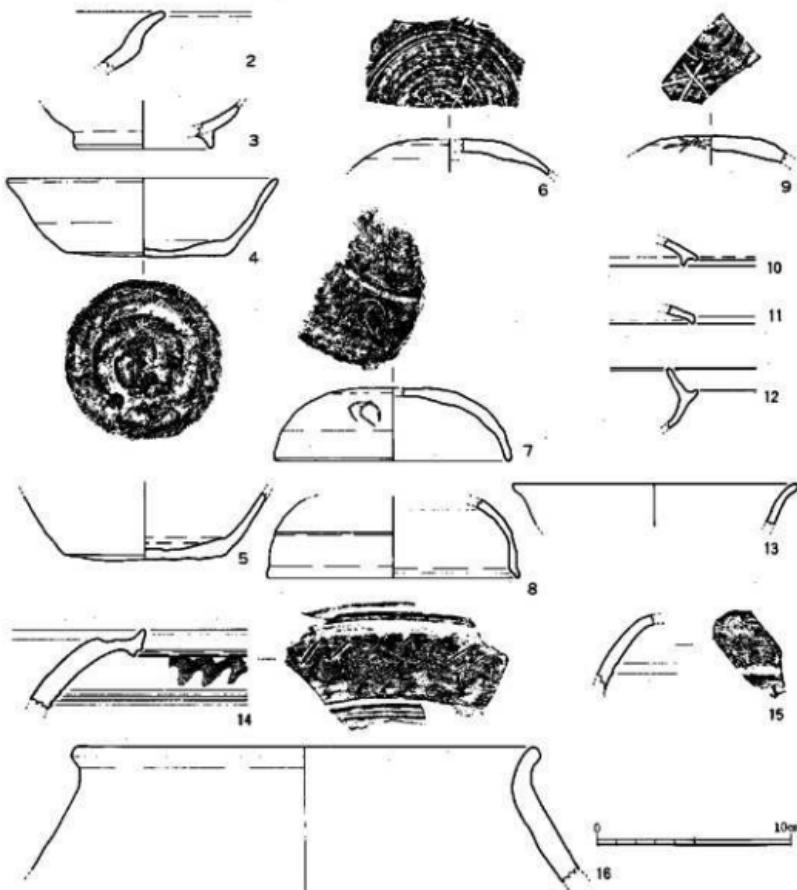


Fig.5 2号流路出土遺物1 (1/3)

小振で器厚も薄い。器表が磨滅気味のため、櫛状工具の単位まではうかがえない。西岸で出土したもの。16は、西岸出土の土師器の蓋の口縁部である。すばまり気味にのびてきた体部から、小さく外反させて口縁を作り出している。径1mm前後の砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。口径24cmをはかる。17~28は瓦片である。厚さ2~2.2cm、1.6~1.8cm、1.1cmの三種がある。最も厚いもので2.2cmであり、全体に薄手であるといえる。焼成のあまいものが多く、それらは土師質にとどまっている。すべて、内面に布目、外面には繩目をとどめる。なお、以下で内面・外面というのは、瓦の成形時に型にあてられた側を内面、その反対面を外面とする。17は平瓦片である。胎土は比較的精良で、堅く焼成され灰色を呈する。厚さは、1.7cmをはかる。18は熨斗瓦である。左右両側に面取りされた面をもつ。特に、一方の面は、内面側から切られたことが明瞭である。熨斗瓦が、丸瓦または平瓦を縱方向に2つに割ってつくられることを考えると、おそらく丸瓦を半割する際に、内面からへラまたは刃物で切れ目を入れ、折り取ってできた面であることが想定できる。胎土は微砂質であるが精良で、焼成はあまり淡褐色を呈する。厚さ1.7cm。19は、厚さ1.1cmの平瓦で、最も薄い。胎土は、砂をほとんど含まず精良である。焼成があまく、褐色を呈する。20は、一方の端部を残す平瓦片である。厚さ1.7cm。焼成はややあまく褐色を呈し、大小の砂粗を含み粗い。21も片側に斜めにへラで面取りされた面をとどめる平瓦片である。厚さは、1.6~1.8cmをはかる。微砂はじりの胎土で、焼成はあまり淡茶褐色を呈する。22は、18と同様に内面側から切られた面をとどめている点、及び全体に丸味が強い点から、丸瓦を半削して作られた熨斗瓦であると思われる。拓本の内面上方に、斜めに断面箱形の凹みがはしつけている。胎土には小さい砂粒がまじり、焼成は普通で暗灰褐色を呈している。厚さ1.8cm。23は、一端に面取りされた面をのこす平瓦片である。外側からへラまたは刃物で切りはなした後、内面側にはみ出した粘土を指で外面側にむかっておさえつけている。砂粒を多くまじえる。焼成はあまく、暗褐色を呈す。厚さは1.6cmである。24は、1つの端面を持つ平瓦片である。焼成はややあまく、暗褐色を呈する。胎土は、砂まじり。厚さ1.8cm。25も一方の側面を持つ平瓦片である。2号流路西岸の出土。厚さは、1.8cmをはかる。胎土は砂粒をまじえて粗いが、焼成は普通で灰褐色を呈する。26は、一端の面を持つ平瓦片である。端部はへラで面取りがされているが、外面側が一部欠けている。胎土には、砂粒・キンウンモがわずかに含まれている。厚さは2.2~2.7cmで、最も厚い。焼成はあまく、茶褐色を呈する。27は、一側面と一端面をとどめる平瓦片である。西岸出土。径1~2mmの砂粒を多く含み、焼成はあまく、器表は磨滅している。淡褐色。厚さ1.7cmをはかる。28は、一端の面をのこす平瓦片である。厚さ2cm。砂粒を多く含む。焼成はあまく、暗褐色を呈している。この他、小片のため図示できなかった瓦片が若干あるが、いずれも平瓦片である。

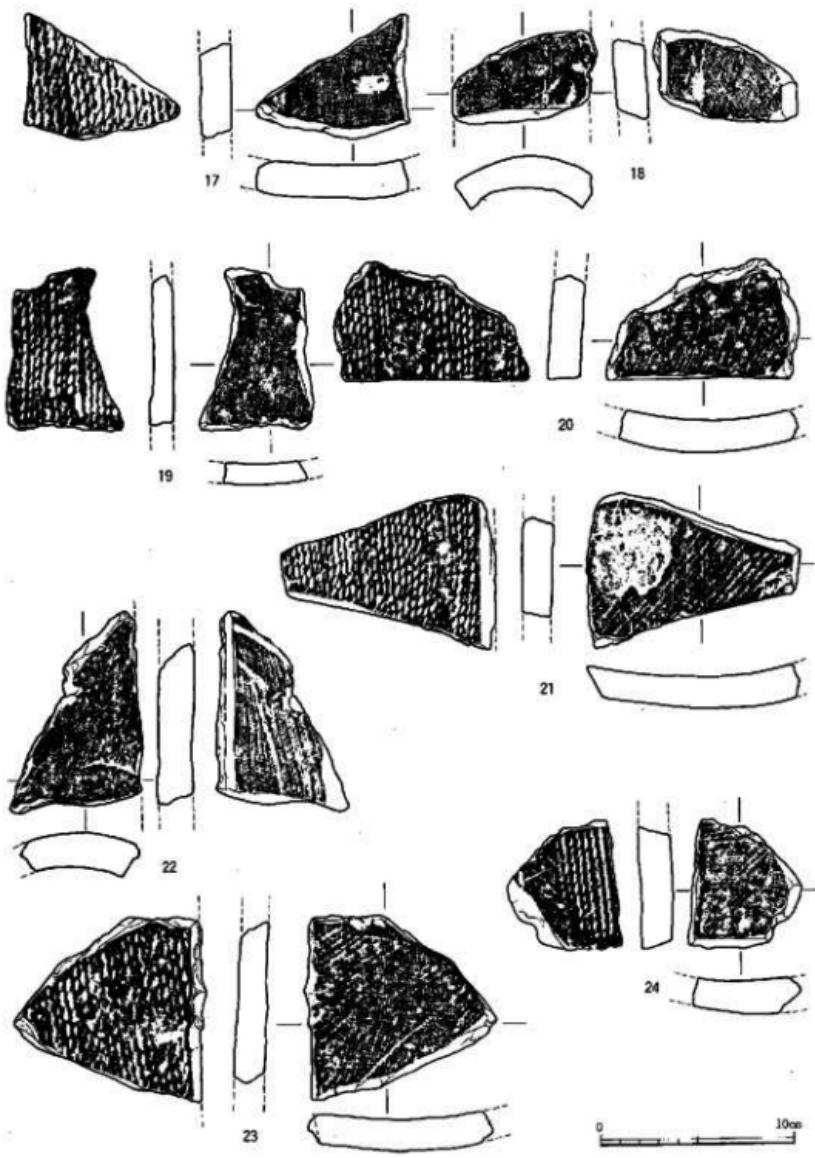
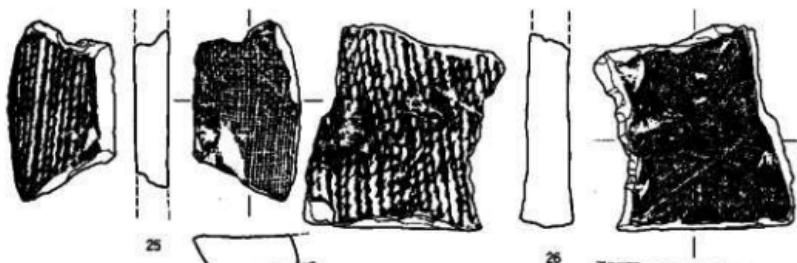


Fig.6 2号道路出土遺物2 (1/3)

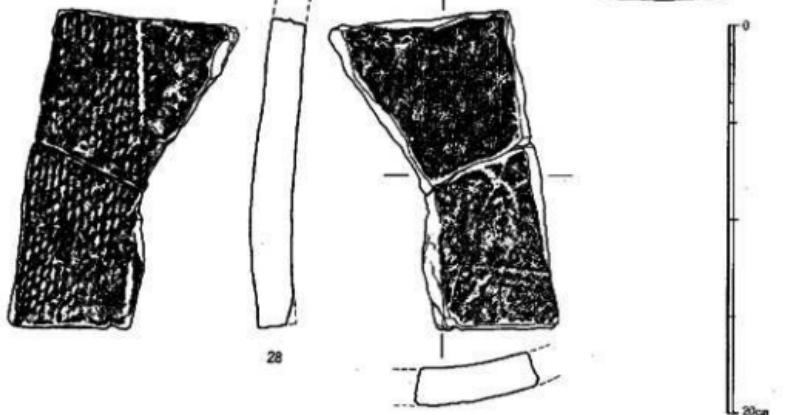
11



25

26

27



28

29  
20cm

Fig.7 2号流路出土遺物3 (1/3)

## (3) E~H区 Fig.9~10, PL.3

C・D区においては、遺構は検出されなかった。

E区からH区にかけては、柱穴状のピット群が検出された。点々と存在するG区・H区の2基をのぞいて、3群に集中する。第1次調査の成果と考えあわせると、おそらく古墳時代の堅穴住居址の柱穴と思われる。道路敷の整地か何かで削平されて、堅穴住居址の壁面のだらあがりが、とばされてしまったものであろう。

出土遺物は、阿高式系の縄文時代中期土器片から土師器片・須恵器片まで出土しているが、実測にたえるものは少ない。Fig.8, PL.11-(1)

29~31は、須恵器壊蓋の小片である。29には、6条を単位とする施文具による梅描波状文が施される。施文部位・器壁の傾き具合から、短頸壺の口縁部の可能性もある。径10.4cmをはかる。30は、頂部のヘラケズリの上にヘラ記号がみとめられる。内面は、ヘラケズリの後にヨコナデを施している。31は、径12cmをはかる。口唇部内側で小さく段をなす。32・33は須恵器の壊身である。32は、口径12cmをはかり、受け部の立ちあがりは大きい。33は、小片のため径を出しえない。34は、土師器の壺の口縁部である。体部は内湾気味に立ちあがり、ゆるく外反して口縁をなす。35は、扁平片刃石斧である。板岩製で、長さ6.1cm、幅2.8cm、厚さ0.8cmをはかる。刃を研ぎ出す面から反対面にかけて刃部が欠損し、一見両刃状をなす。使用によるものと思われる。36は手捏ねの土師器である。口径3.2cm、底径2.2cm、器高2.2cmで、内外に指による押圧痕跡を明瞭に残す。

29~32・35・36は、P-3~9より出土したもので、各ピットごとにとりあげてはいない。

註。TK85の壺A類に類別がみられる、「海苔田」大阪府文化財センター 1982年。

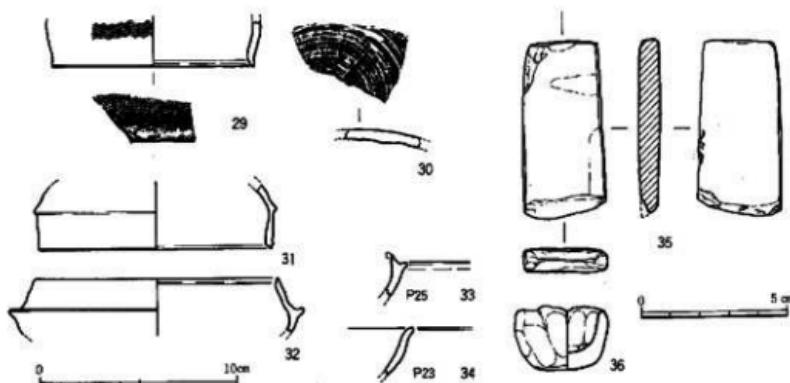


Fig.8 E~H区ピット出土遺物 (1/3, 35・36…1/2)

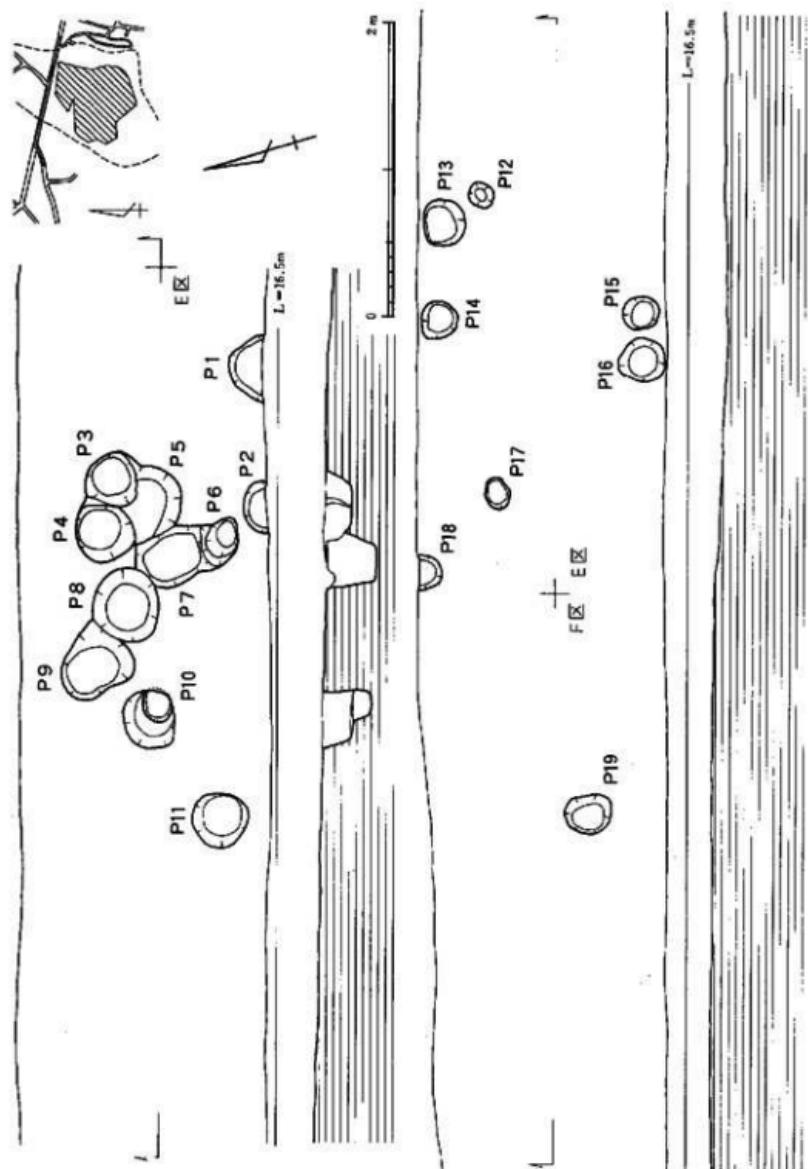


Fig.9 E～F区連構実測図 (1/40)

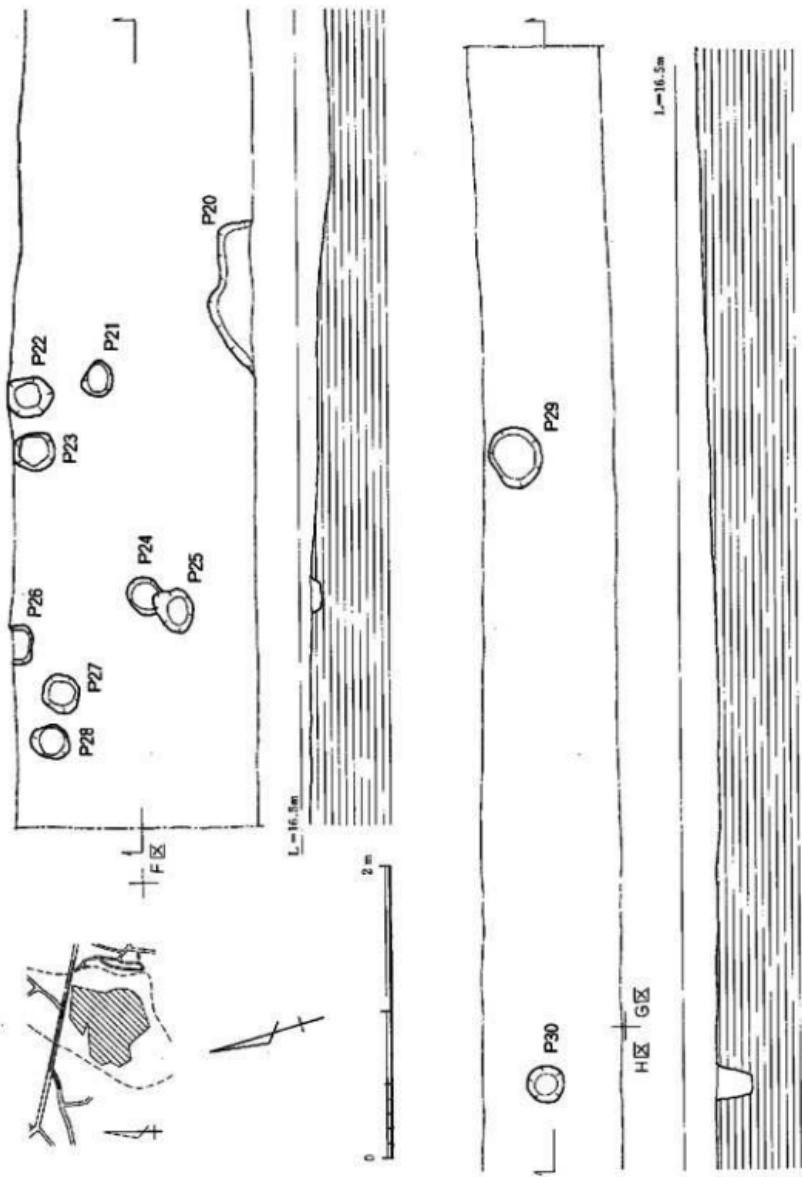


Fig.10 F ~ H区造橋実測図 (1 / 40)

## (4) I区 1号溝 Fig.12, PL.4

I区では、柱穴状ピット1基と溝1条が検出された。溝は、幅50cm前後、深さ20cmをはかる。溝の方向は、 $N-11^{\circ}05'E$ を示す。第1次調査の4号溝につながると思われる。第1次調査時には、溝状造構を確認したのみで調査していないが、今調査1号溝の付近には三条の溝が確認されている。

遺物は、阿高式系の縄文土器片・土師器片・須恵器片・黒曜石チップなどが出土している。Fig.11, PL.11-(2)

図示できたのは2点のみである。

37は、須恵器の壺蓋である。ヨコナデがなされ、口唇内面は小さく段をなしている。胎土は、微砂をまじえる。小片であるが、口径は12cmと推定できる。38は、土師器の壺の頸部である。胎土には微砂・キンウンモを含み、淡褐色を呈す。

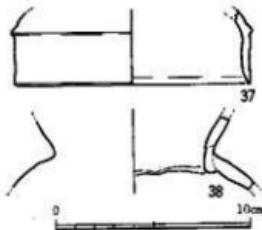


Fig.11 1号溝出土遺物 (1/3)

## (5) J~K区 3号・4号流路

Fig.13, PL.5-6-(1)

J区からK区にかけては、流路が2本と溝状造構が1条、検出されている。3号流路は縄文土器の包含層を切りこんで流れているも

P31

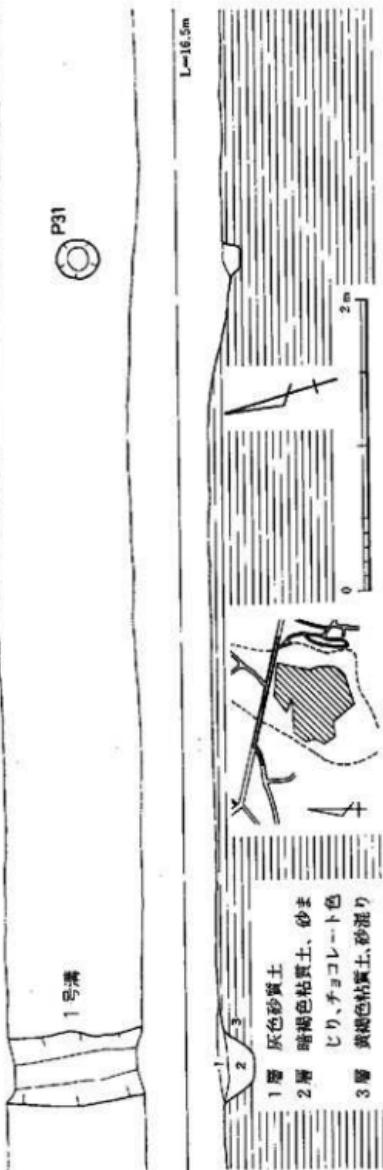
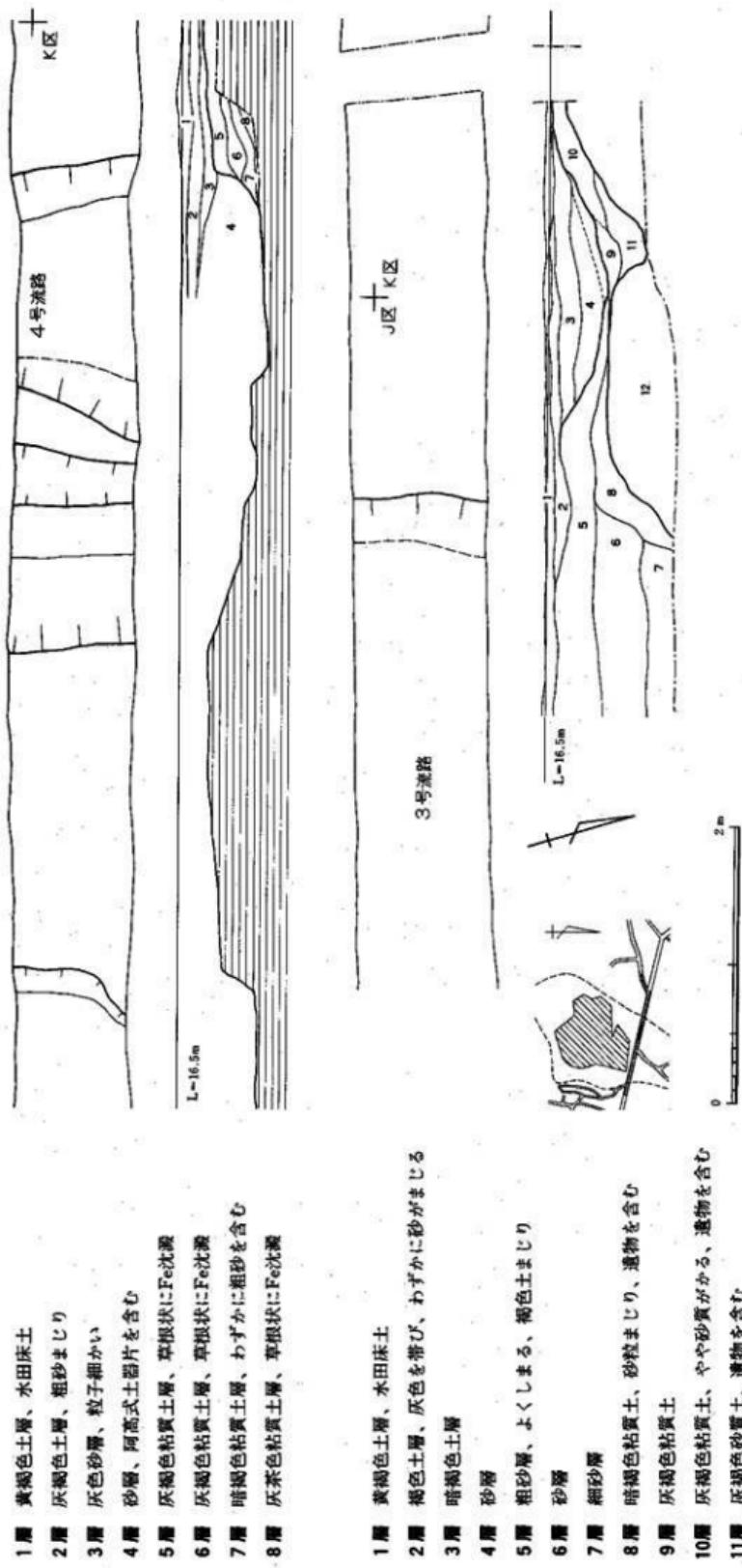


Fig.12 I区遺構実測図 (1/40)



のである。J区の1号溝が掘りこまれている土層は、砂まじりの黄褐色粘質土で、現場での所見では3号流路のものと思われる砂質土の上にのっている。したがって、2号流路は縄文時代以降、6世紀

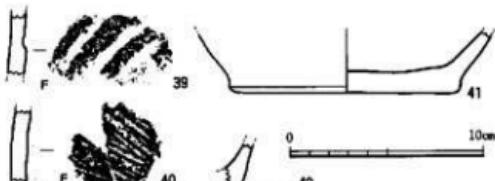


Fig.14 3号流路出土遺物 (1/3)

以前に流れ、埋没したものと考えられる。

出土遺物は、39が土層の8層、40~42が12層出土である。 Fig.14, PL.11-(3)

39は、胎土に滑石を混入し、斜行する凹線が施された阿高式系の土器片である。40は、外面上に貝殻による調整痕をとどめる。砂粒をまじえるが、灰褐色に比較的よく焼けている。41の胎土は、砂・小礫を多く含んで粗い。焼成も悪く、器種はあれている。底径11.6cm。42は、41と同様の胎土・焼成をもつ底部の小片である。

溝状造構は、土層の観察によって確認されたもので、調査しえなかった。そのため、溝と断定するのはさけ、造構番号もつけていない。

4号流路は、K区の西半分に検出された流路であるが、3号流路と4号流路との中間の灰色砂質土から、縄文土器片・土師器片・須恵器片・石器片が出上している。 Fig.15, PL.12

図示できたのは、6点のみである。43は、胎土に砂粒・キンクンモをまじえる縄文後期土器片である。焼成は普通で、褐色を呈する。内面はナデ、外面は条痕をとどめ、口唇部はやや外傾して丸くつくる。44は、滑石を含む阿高式系土器で、口唇部を肥厚させる。凹線と同じ施文具で口唇上面を刺突し、さらに口唇上面から内側にかけてヘラ先で引いた様な鋸い刻み目が縦にはいる。45は、土師器の塊片である。焼成はあまりないが、胎土はよく整い鼠色を呈している。器表は磨滅していて調整はうかがえないが、薄手に仕上げている。46は安山岩製の石斧片である。刃部は、やや偏りがあるが両側から研ぎ出されている。一側面の研磨面をとどめている。石材を荒削りし、側面と刃を研ぎ出したものである。現存長5.1cm、最大幅3.3cm、厚さ1.9cm。47は安山岩製の石錐である。先端部は、白く磨滅している。現存長5.1cm、最大幅3.3cmをはかる。48は石斧未製品である。安山岩製。片面は全面剥離されているが、裏面は原石から削りとられたままで、原石面をのこす。長さ14cm、最大幅6.5cm、厚さ4.65cm。

4号流路は、幅3.5m、深さ0.5mをはかる。第1次調査の「第2号川」にあたると思われるが、判然とはしない。流路の底は凹凸が多く、川底にはりつく様な形で縄文土器片が出土している。土層の観察や、出土遺物には縄文土器片しかみられない点などからして、比較的早い時期、たとえば縄文時代をさほど降らない時期に埋没したと思われる。

出土遺物は、すべて縄文時代の土器である。 Fig.16, PL.13

49～54・56・57は、胎土に滑石を混入する阿高式系土器である。49は、外面褐色・内面黒褐色を呈する。厚さ0.8～0.9mmをはかる。やや外反気味にひらいて、口縁付近で小さく内弯し、丸くおさめて口唇部をつくる。口縁部文様帶は、2条以上の平行凹線をもって体部と区別される。口唇には円形の凹点文、平行凹線上部には、これにかかって右下りの梢円形の凹点文を配し、その間を平行する縱の凹線でうめている。50は、口唇部と口唇部上面に凹点文を配し、その下に右下りに斜行する凹線をあしらう口縁部片である。51は、斜行する凹線と凹点文の一部をとどめる破片で、おそらく口縁部近くのものであろう。52には、浅い凹線がわずかにうかがわれ

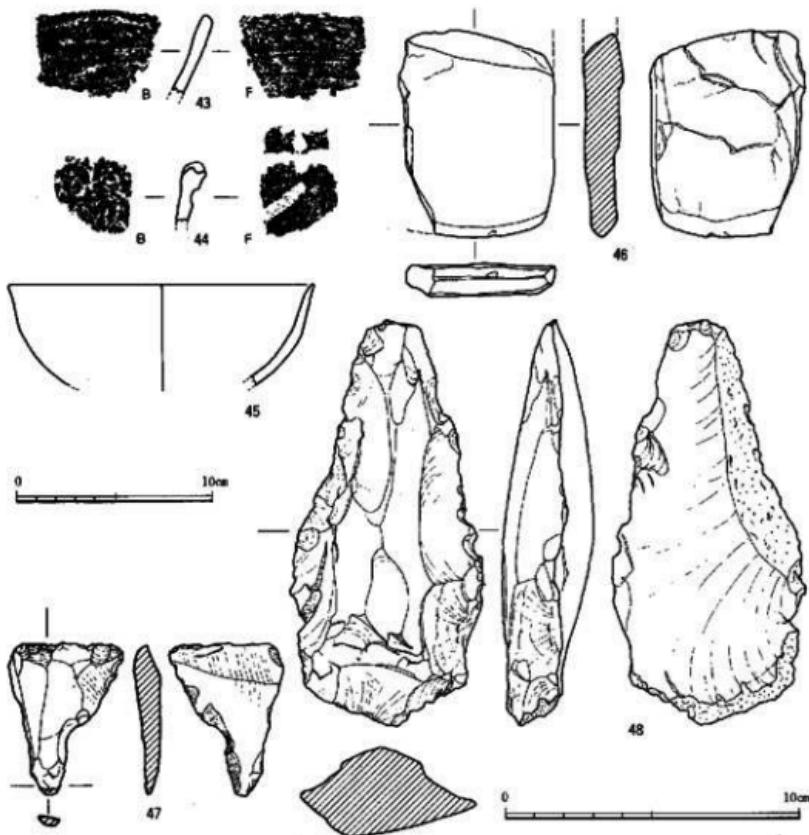


Fig.15 灰色砂質土層出土遺物 (1/3, 46～48…1/2)

る。53は、縦横に凹線を駆使した破片で、意匠としては最も変化にとんでいる。上下を決めがたかったが、上に開く器形と思われる所以、それによって図示した。凹線は、拓本にも表われている通り、シャープに刻みこまれている。上方の横位の凹線の断面は、下に向ってやや角をなすが、全体にU字形の断面をなしている。54は、斜行する凹線の破片である。凹線は、やや浅めである。55は砂粒を多く含む胎土を持ち、焼成は比較的良い。口縁端は丸くおさめる。内面は横方向の条痕をとどめ、外面は横方向にヘラナデをしている。56には、わずかに縦方向の凹線が2条みとめられる。凹線は非常に浅く、わずかに凹んでいる程度である。57は凹点文を持つ小片である。おそらくは、2列以上の列点文の一部と思われる。凹点の中央には稜がみとめられ、凹みが浅くまた小さな楕円形を示している。58は無文の土器片で、口唇部を外傾させておさめる。胎土は、砂粒を多く含む。外面には横方向の条痕がみとめられる。59も58と同様の土器片である。いずれも、暗褐色に焼きあがり、器壁の表面は比較的平滑に仕上げている感がある。60も無文土器の小片である。内面に斜め方向の条痕をとどめている。胎土や焼成については、58・59と同様である。61・62は底部である。いずれも砂粒を多く含み、焼成はあまり。器壁はあれ気味である。61で底径8.8cm、62で15.4cmをはかる。

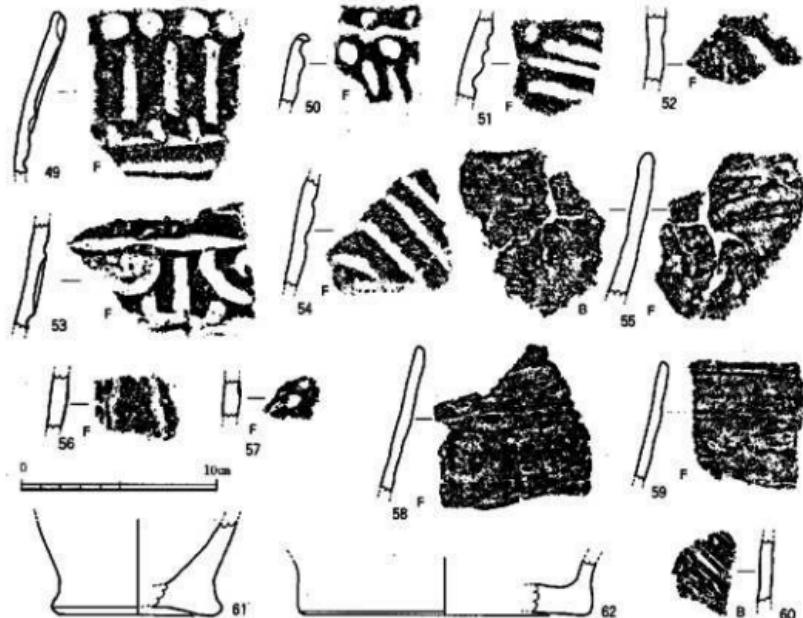


Fig.16 4号流路出土遺物 (1/3)

## (6) M~N区 1号~3号貯蔵穴 Fig.18, PL.6-(2), 7

M~N区においては、石器の集中する個所（S X01）と縄文後期の貯蔵穴・小ピットなどが検出された。

S X01は、チップ・石器が集中して出土した個所である。随分と注意してさがしたが、遺構としてはおさえられず、不明遺構として扱うこととした。石器は、遺構検出面上に平面的に分布し、垂直分布はみとめられない。チップを除き、製品のみ図示した。Fig.17, PL.14-(1) 63は安山岩製で、2側縁を両側から加工している。用途不明。長さ2.1cm、最大幅2.1cmをはかる。64~66は凹基式の石鎌である。64は安山岩製で完存している。長さ2.1cm、幅1.5cm。65は黒曜石製である。先端と一方の脚を欠く。斜め方向の長めの剥離が特徴的で、片面にみられる。現存長2.2cm、幅1.4cm。66は黒曜石製の石鎌で、厚く大きい。片方の脚を欠く。現存長2.9cm、幅2cm。67は安山岩製の石錐である。先端部を欠く。現存長3.8cm、幅0.8cm。

貯蔵穴は、集中して3基検出されている。幅1mの調査のため、いざれもその一部を調査したにすぎない。貯蔵穴は、調査した後にユンボで掘り取って、土層を実測した。1号貯蔵穴はその東側でピット35に、西側では2号貯蔵穴に切られている。ただし、1号貯蔵穴と2号貯蔵穴との切り合いは、土層観察による限り明瞭ではなく、貯蔵穴の形状から判断した。すなわち両貯蔵穴とも東壁の立ち上りはゆるく、西壁は垂直に近く立ち上っている。それを前提とすれば、1号貯蔵穴の西壁は、2号貯蔵穴の東壁に切られていると考えることができる。1号貯蔵穴は、調査区内にその1/2弱がはいっていると思われ、この限りにおいて、さわらし1.9~2mをはかる。深さは、0.95mである。2号貯蔵穴は、その一部がかかっているのみであるが、1号貯蔵穴の2倍近い大きさが想定できる。深さは、1.15mをはかる。両貯蔵穴とも、最下層からドングリの実が多数出土している。3号貯蔵穴は、その上端の一部を検出しているのみで、ほとんど区域外になっている。出土遺物は、小ピット及び3号貯蔵穴出土のものをFig.19, PL.14-(2)に、1号・2号貯蔵穴のものをFig.20, PL.14-(3)に示した。

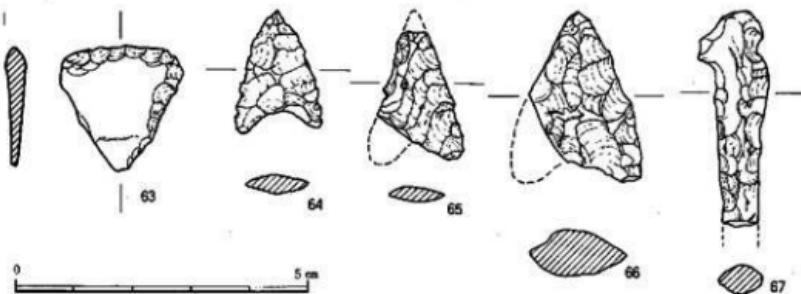


Fig.17 S X01出土遺物 (1/1)

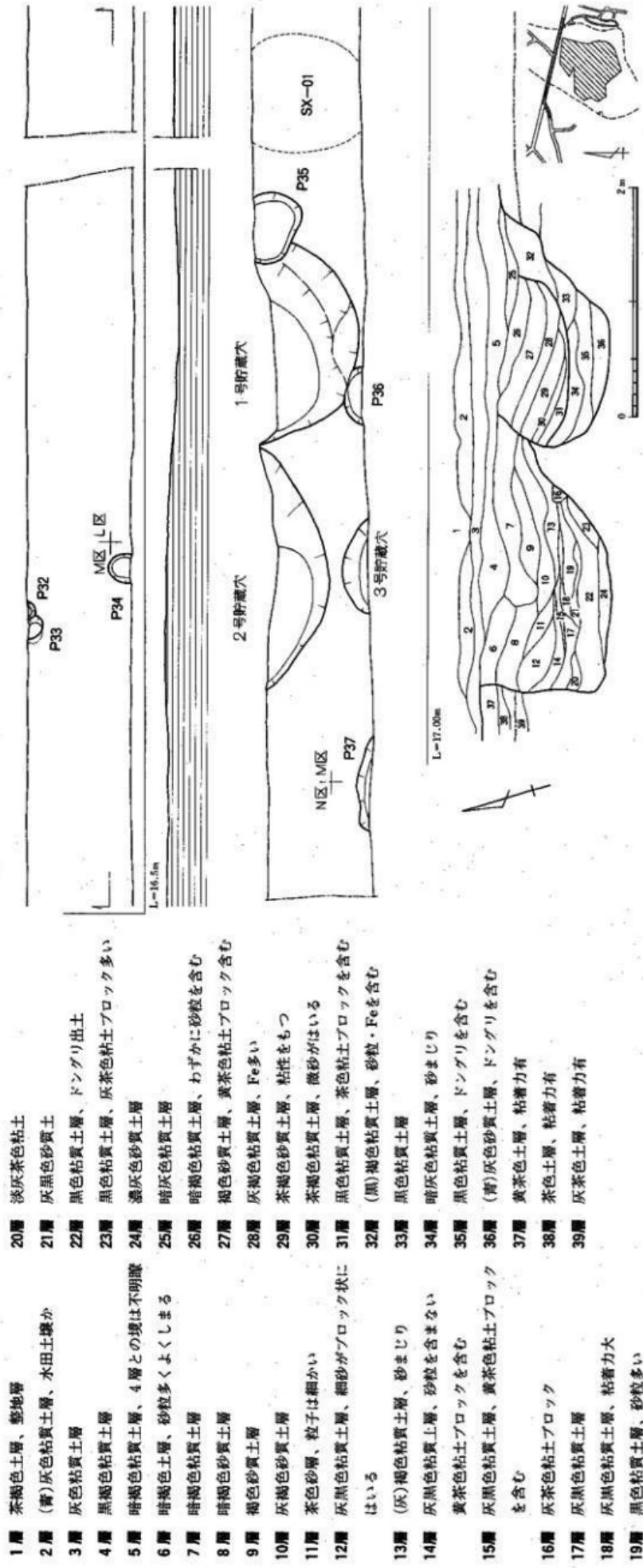


Fig.18 M・N区連続実測図 (1/40)

68はピット37出土、69・70はピット35出土、78はピット36出土、71・73・75・76は3号貯蔵穴出土、その他はM区からN区にかけて遺構検出時に出土したものである。68・70・72・74は、胎土に滑石を含む。68は、口縁端を折り返して肥厚させており、玉縁状を呈する。無文。69には斜行する凹線がみとめられるが、滑石は混入していない。胎土に砂を多く含んで粗く、焼成もあまくて、全体にもろい。70の凹線はやや箱形を呈し、上側で凹み内部の棱がつよい。71は、内面で斜位、外面で継位の条痕をとどめる無文土器片である。胎土は砂粒をまじえる。焼成は普通。72は、斜行する凹線の縁をナデで仕上げている。凹線は、細めであるがくっきりと刻まれている。胎土に含まれている滑石は、粉末状で量も少ない。赤褐色を呈し焼成も良い。坂の下I式の精製土器と考えられる。73は、無文の口縁部破片である。74は無文であるが、滑石を含み、口縁を肥厚させている。75・76は、底部付近の破片である。77は、弥生時代後期の器台形土器の脚の破片である。胎土は、径1mmの大砂粒を含んだ微砂質で、焼成はやあまく、明褐色を呈する。78は、中央に敲打の痕跡を残し、凹み石とみられる。玄武岩製。

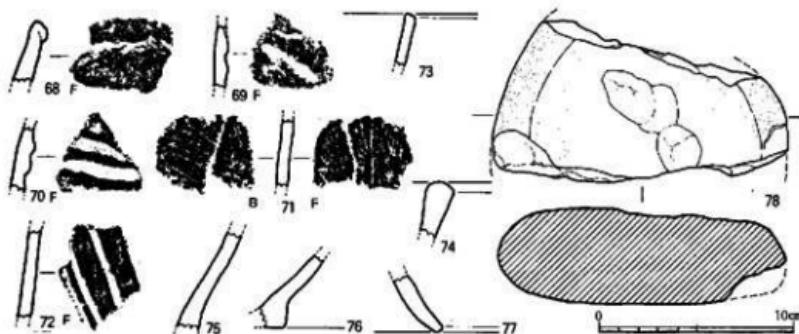


Fig.19 小ピット・3号貯蔵穴出土遺物 (1/3)

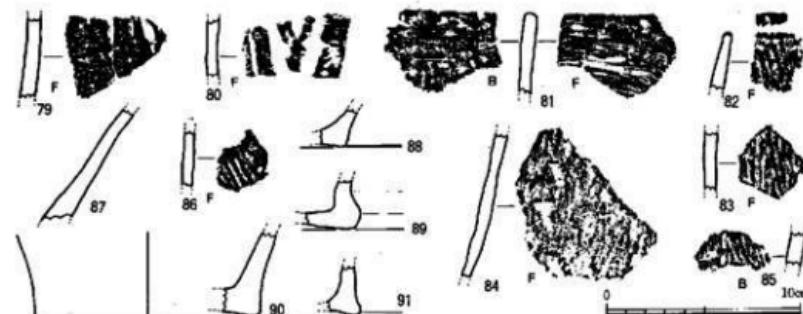


Fig.20 1号・2号貯蔵穴出土遺物 (1/3)

79~81は1号貯蔵穴出土、82・86~91は2号貯蔵穴出土、83~85は土層図の第4層出土である。79は、滑石を含む阿高式系の土器片である。凹線を施した後に、横位のナデ調整を施している。80も滑石を含み、凹線の幅は狭い。79・80とも、滑石は粉末状で、量も少ない。坂の下I式と考えられる。81は、内面・外面に横方向の条痕をとどめている。外面の条痕は、杼目板調整によるものと思われる。内面は、条痕の上にナデ調整を施している。82は、口唇上面に刻み目を有する。器表は、ややあれ気味であるが、外面は継に杼目板調整を施している様にみられる。83は、外面に杼目板調整の条痕をとどめる小片である。調整は、縦方向になされている。84は、内面はナデによって仕上げているためか調整痕をとどめてないが、外面においては、わざかに縦方向の条痕がうかがえる。85は、内面で縦位の杼目板調整がみとめられる小片である。86は、外面に二枚貝による斜め方向の条痕をとどめている。87は底部に近い体部の破片。88~91は、底部の破片である。89は、腰が張り出し、内側に大きく弯曲して体部につづく。内側に屈曲する部分には、指頭による圧痕がみられる。滑石を含んでおり、阿高式系の土器と考えられる。90では、底径11.6cmを推定することができる。

#### (7) P・Q区 Fig.21, PL.8

第2次調査で、最初に手がつけられた地点である。遺構は、小ビットを19基検出したのみである。土器片の出土もみられなかった。

Q区のつきあたりで、土層の状態を実測している。この周辺の一般的な堆積状況を示すと思われるので、少しくわしく記す。

最上層 道路の舗装による整地層である。マサ土やバラスが混っている。道路面下のみに存在する層なので、土層番号は付さない。

第1層 水田土壤。周辺一帯は水田地帯であり、この現耕作土にあたると考えてよからう。暗灰色の粘質土である。

第2層 暗灰色粘質土のブロック

第3層 灰色粘質土。地点によって色調は異なるが、大体水田の床土にあたる。

第4層 灰褐色粘質土。鉄分の赤い斑点がまじっている。床土下に一般にみとめられる土層である。ただし、この土層そのものは、包含層とは考えられない。早くても中世以降の整地層ではないかと思われる。

第5層 黄褐色粘質土。いわゆる地山であり、遺構確認面である。最も粘性にとんでいる。

以上の土層の堆積状況は、O~Q区において最も典型的にみられるものである。道路部分や水田部分では、地山直上まで削平がなされ、包含層が消滅しているという状態をうかがうことができる。

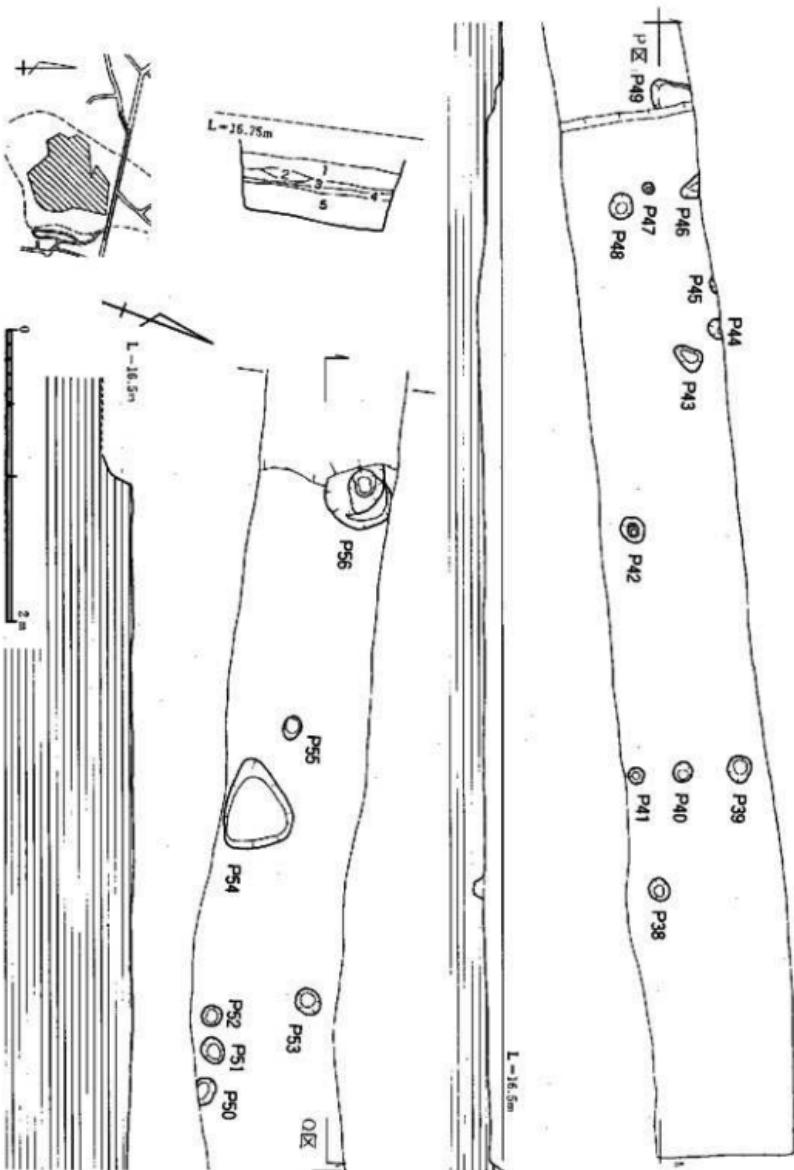


Fig.21 P・Q区造構実測図 (1/40)

### 第三章 ま と め

**調査上の問題点** 福岡市域において、下水道管埋設工事に伴なう埋蔵文化財の発掘調査は、国指定史跡である板付遺跡の周辺地区を除けば、初めてのことである。幅1mの帯が100m以上ものびる調査ではたして遺跡を理解する上で有効な調査がなしうるのかどうか、担当者としては終始疑問をいだいていた。また、「第一章　はじめに」で触れた様に、様々の状況から虫喰い状に掘らざるをえなかつた。そのため、全体にわたる土層図を作成する時間的余裕はなかつたし、写真も暗闇にかかわらずその都度撮らざるをえなかつた。記録保存という名目での調査でありながら、その調査記録にすらお金を割せなかつたのは遺憾とせざるをえない。

**調査の成果** 上述した様に、長いトレンチの様な調査ではあったが、幸いにも第1次調査地点に隣接していたために比較的考えやすかったといえよう。

縄文時代の遺構について； 1号～3号の貯蔵穴とその周囲の小ピットがあげられる。貯蔵穴は、1号・2号貯蔵穴を覆う第4層から縄文時代後期初頭に位置付けられる土器片が出土している点や、それぞれの貯蔵穴では阿高式系の土器片も含まれるもの、主体は滑石を含まない無文の土器片である点から、縄文時代中期後葉から後期初頭ごろに營まれ、後期初頭には埋つたものと考えられる。また、第1次調査では「第2号川」の東岸に貯蔵穴群を確認しているが、今次調査においては西岸にあたっており、貯蔵穴群がまだ西北にのびるであろうことが予想される。「第2号川」については、第1次調査では、幅10m以上、深さ1.5m以上とされている。第2次調査において、位置的にこれに該当するのは4号流路であるが、前述した様に幅3.5m深さ0.5mと小規模にすぎず、4号流路から西は、地山がローム層であり、川の存在は考えられない。一方、3号流路は、西岸を確認したものの、東岸も深さも確認できていない。考えられることは、「第2号川」は今次調査の3号流路にあたり、4号流路はその支流であろうという可能性である。ここでは、一応そのように理解しておきたい。

古墳時代の遺構について； E区からH区にかけて検出されたピット群が、この時期にあたると思われる。第1次調査では、古墳時代の整穴住居址群が南から北にのびており、おそらくはその整穴住居址群の柱穴であろうと思われる。出土した土器は、全体として6世紀代、主としてその前半の傾向を示している。I区においては、1号溝が検出された。第1次調査の4号溝にあたると思われる。1号溝からは、5世紀後半の須恵器が出土しており、およそその年代とみて大過ないと考えられる。

古代の遺構について； 1号・2号流路があげられる。時期を判断する決め手には欠けるが、瓦が全体に薄手である点、Fig.5の3の様な土師器の高台付壺が出土している点から、古代でも後半の時期を考えたい。

図 版  
PLATES



(1) 調査開始 (P区、南西より)



(2) 調査風景 (P区、北東より)



(1) 1号流路土層（南より）



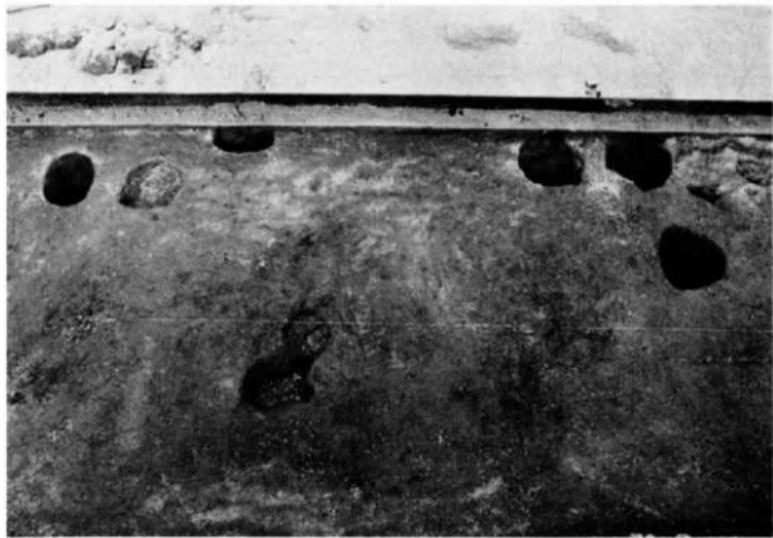
(2) 2号流路土層（南より）



(3) 2号流路土層（南より）



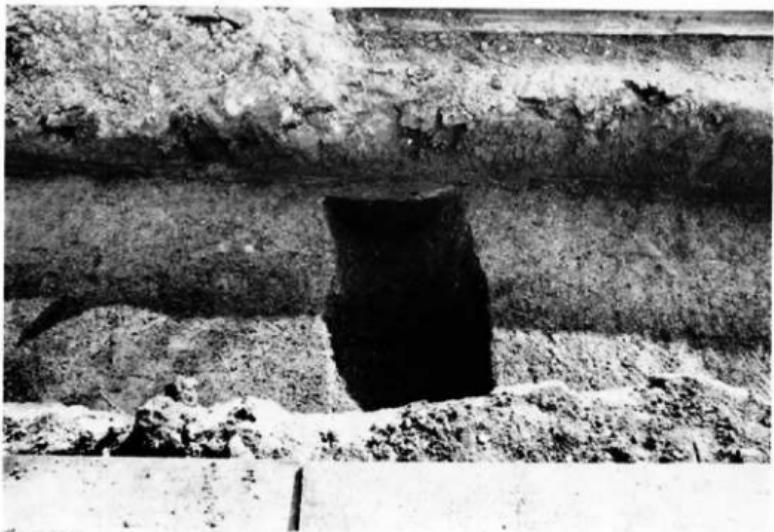
(1) E区ピット群 (西より)



(2) F区ピット群 (南より)



(1) 1号溝（東より）



(2) 1号溝（北より）



(1) 3号流路土層（北より）



(2) 3号流路西岸（北より）



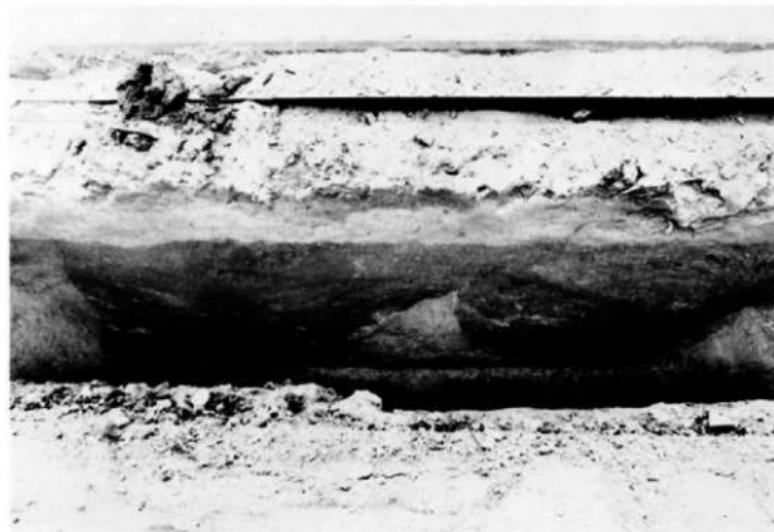
(1) 4号流路西岸（北より）



(2) M区貯藏穴群（東より）



(1) 1号貯藏穴（南より）



(2) 1号・2号貯藏穴土層（南より）



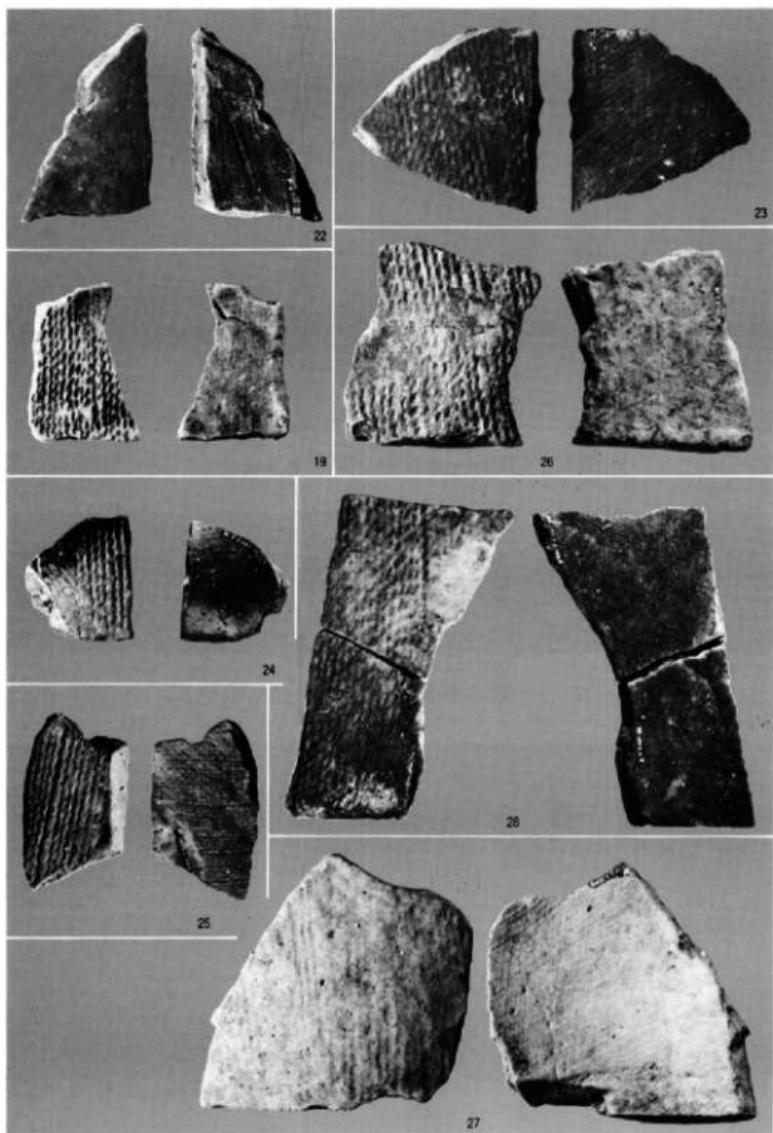
(1) P・Q区遺構（南西より）



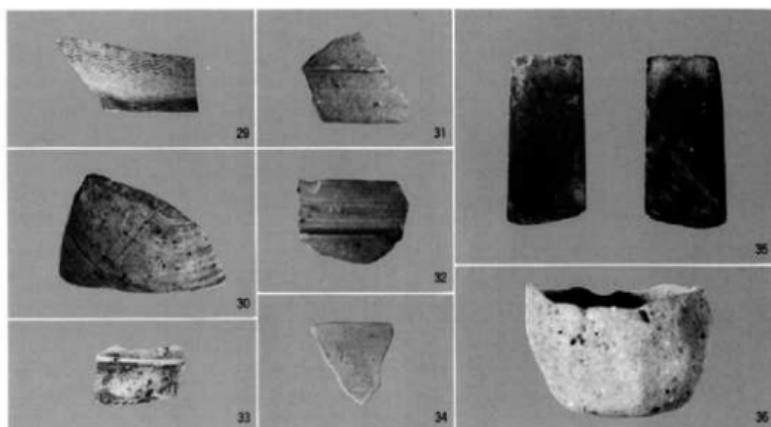
(2) Q区土層（北東より）



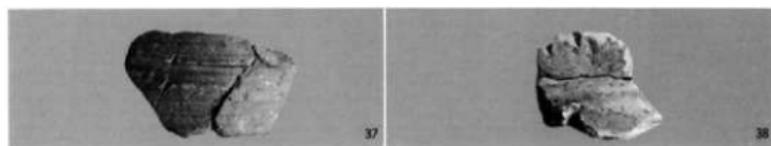
(2) 2号流路出土遗物 1 (2~14 1/2, 17~21 1/3)



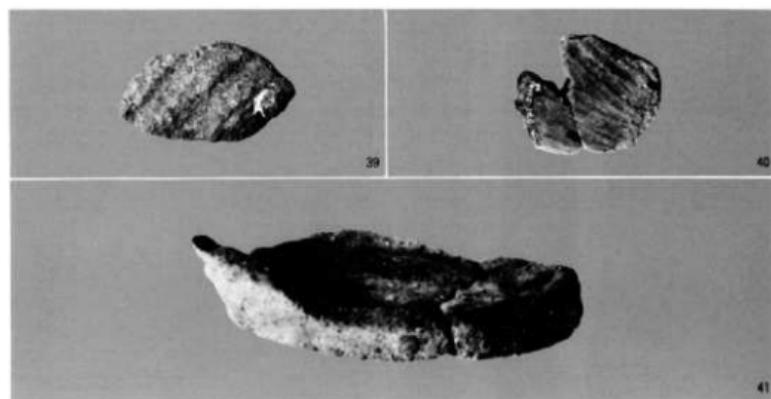
2号道路出土遺物2 (1/3)



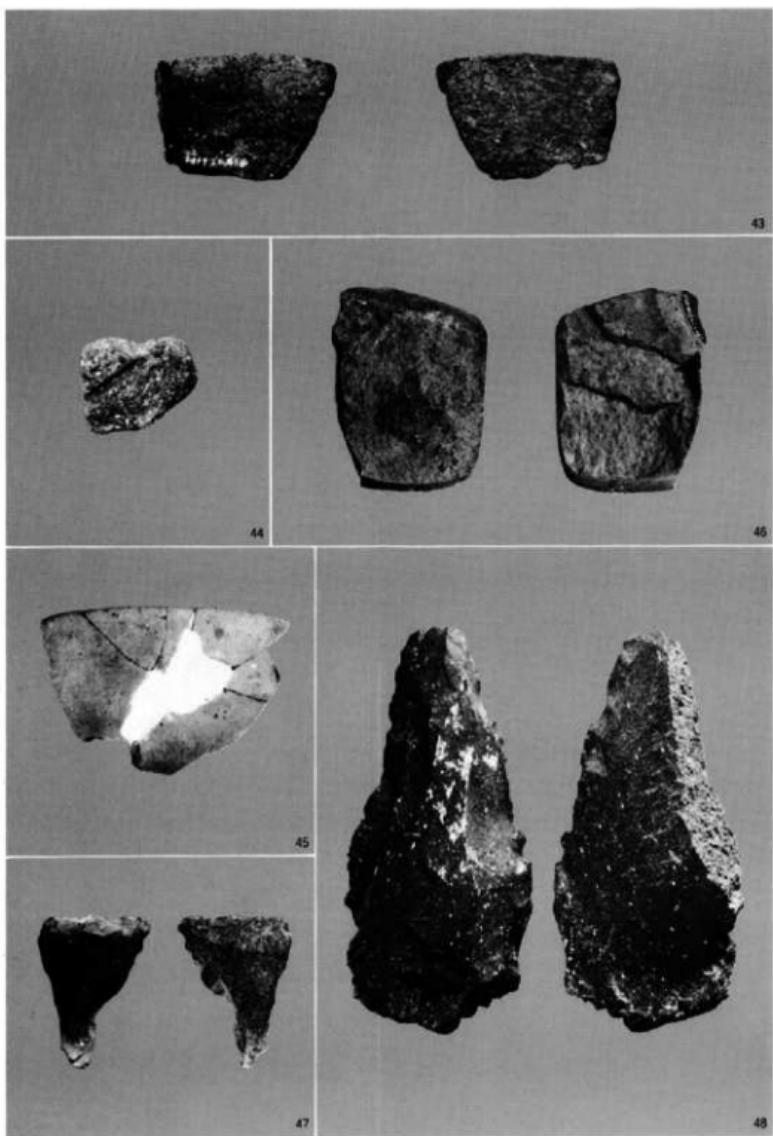
(1) E～H区出土遺物 (1／2、36のみ1／1)



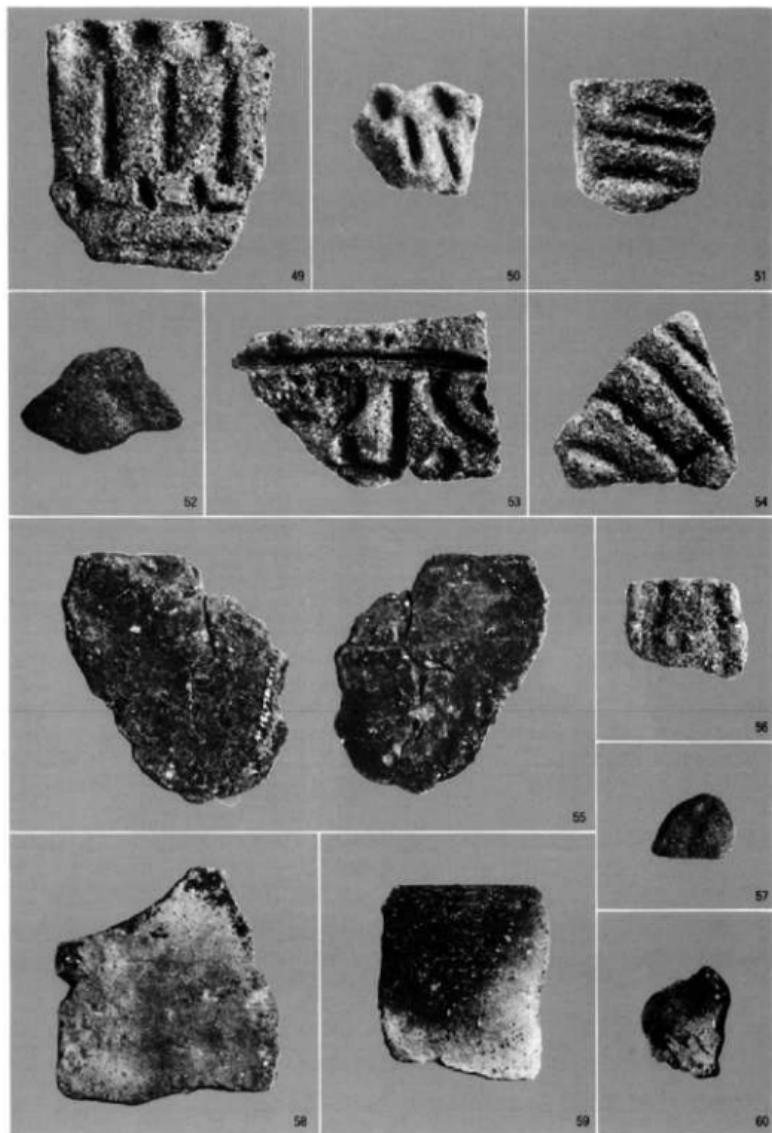
(2) 1号溝出土遺物 (1／2)



(3) 3号流路出土遺物 (1／2)



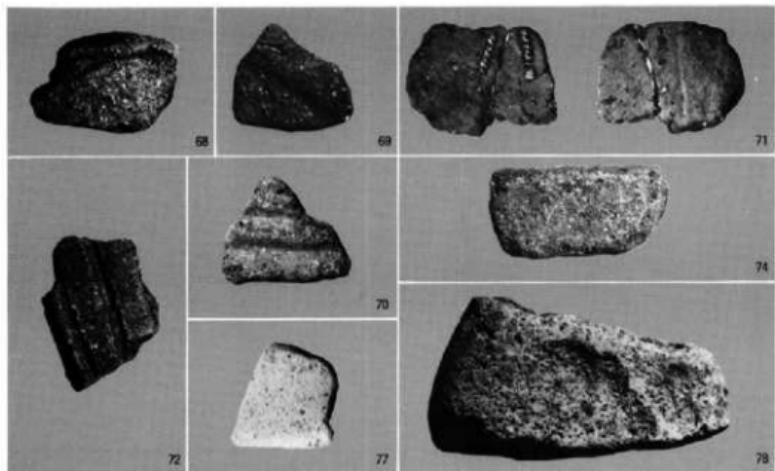
灰色砂質土層出土遺物 (1 / 2)



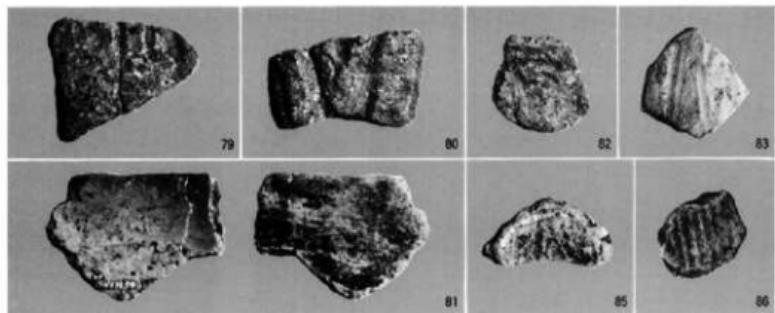
4号道路出土遗物 (1/2)



(1) SX01出土遺物 (1／1)

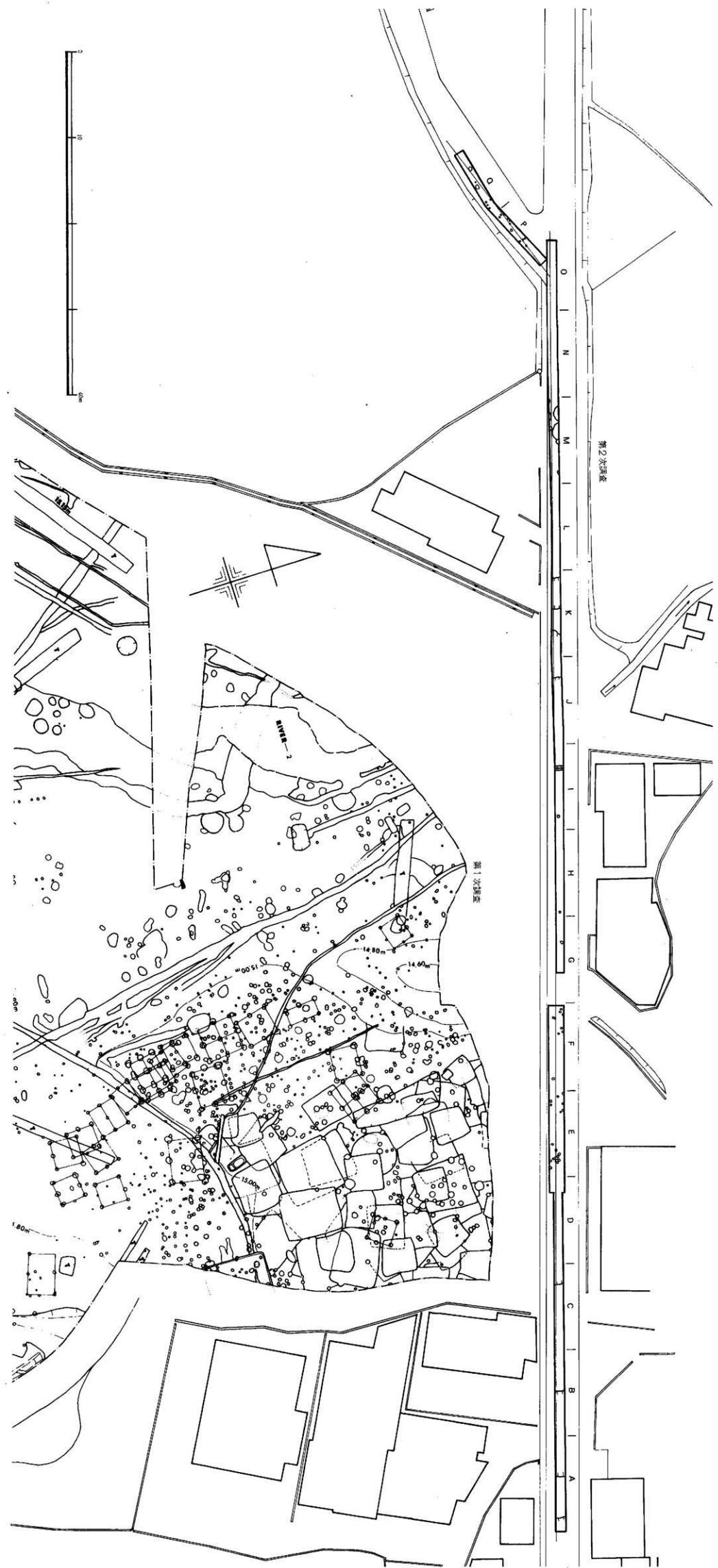


(2) 小ピット・3号貯蔵穴出土遺物 (1／2)



(3) 1号・2号貯蔵穴出土遺物 (1／2)

付図 野多目拓渡遺跡 第1次調査・第2次調査地点位置図 (1/300)



福岡市南区  
野多目拈渡遺跡 II  
福岡市埋蔵文化財調査報告書136集

©1986年3月31日発行

編集 発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目7-23  
電話 (092) 711-4667  
印刷 正光印刷株式会社  
福岡市西区徳永877-1  
TEL (092) 806-5708